

「ひみつ箱」

登場人物

義高 ― よしたか ― 43歳（1場時）  
真琴 ― まこと ― 40歳（1場時）

義高が住む都内のマンションの一室。8畳ほどのリビング。殺風景な印象。正面に向かって二人掛けのソファが置かれ、その前にはソファテーブル。上手にキッチンへ抜けるドア。下手には寝室へと通じる引き戸。正面奥にはガラスのサッシがあり、その向こうにベランダが窺える。ベランダは、そのまま下手の寝室の外へと繋がっている。下手奥に奥向きにデスクと椅子。デスクの上は閑散としている。脇には小さな本棚。数冊の本。上手手前に小さめのダンボール箱が無造作に二つほど。一つ、蓋が半分ほど開いていて、中からはベビー用品が覗く。

1.

平成23年3月の終わり。夕方に差しかかる頃。時間の進行とともに、ベランダへと差し込む日の赤みが徐々に増していく。シャツにネクタイ姿の義高が、ソファに腰を下ろして携帯電話のメールを打っている。

ベランダでは、外出着の真琴が煙草を吸っている。

義高（ベランダを気にする様子もなく、険しい表情でメールに集中している）

真琴（部屋の中を気にする様子もなく、外のいろいろな方向を見渡している）

まるで時間の刻みが止まったかのよう。

真琴（煙草を吸い終え、部屋の中へ入ってきてデスクの椅子へ）…変わらない。

義高 …。（メールを打ち続けている）

真琴 変わらへん、ね。

義高 …何が。

真琴 下の通り。駅からの道もなんも変わってへんかった。

義高 …そうなのかな。

真琴（改めてメールを打つ義高を見て）変わってない。

義高 2年ちよつとでしよ、まだ。

真琴 あ、そうじゃなくて。

義高 え。

真琴 なんかに…もつと変わり果てとるんやないかってドキドキしとったから。

義高 …。(一瞬真琴を見る)

真琴 神戸はめちゃくちゃやったし。お母さんの集合住宅も崩れたでしょ、阪神の時は…もともと潰れそうなどこやったけどね。(小さく笑う)

義高 まあ…あんな立ってられないのは初めてだったけど。(再びメールを打ち始める)

真琴 めっちゃ揺れたんちゃうの？阪神とか新潟の時より大きかったんでしょ。なんか世界でも1900年以降で4番目だったって。

義高 …調べたの？

真琴 ニュースでもいっばいやとったから。せやからもつと…建物が壊れたりとか、道路が割れたりしてるんかと思ってた。

義高 …。

真琴 あ、でも思い出した。そうや、あそこ壊れたんちゃうの？

義高 …あそこ？

真琴 ほら…。あかん、出てこん…。なくなつて更地になつとったよ。駅から来た…いつも買い物行つとった才ゼキの手に、お好み屋あつたでしょ？

義高 …。

真琴 絶対そう、覚えとる。お好み屋やった。何ていうお店やったっけ…。あーここまで出てきとるのに。

義高 あれ、ただつぶれただけ。地震より前に。

真琴 つぶれた？お店が？

義高 まずかったし。…周りは普通に残ってるし。あそこ一軒だけが倒壊とかしないんじゃない。

真琴 …そうやね。

義高 コンビニになるみたい。

真琴 (領いて) 気いついたらみんなコンビニになるね。…まずかったしね。  
間。

真琴 (メールを打つ義高を見て) 私…阪神の時はもう東京やったし、新潟の時も神戸に帰つとったの。東京も結構揺れたんでしょ、新潟の時も。

義高 …向こうにいたんだっけ。

真琴 (領いて) ちょうどあの時やったから、お母さん。(部屋を見回す)

義高 …うん。

真琴 いつつそんな時住んでるとこにそのままおたらぶつかるはずなのに、なんでか別の場所にいるの。

義高 …。(メールの手を止め、真琴を見る)

真琴 あ…。(少しびびくりしたように) 邪魔？

義高 別に。

真琴 地震に遭ったことないとかではないんやけど。

義高 日本に住んでてそんな人いないでしょ。

真琴 うん。でもなんでか大きいのはおらん、そこに。ほんまやったらおったはずなのに。

義高 …だから？

真琴 え。

義高 いいんじゃない、それならそれで。ついてるって云いたいの？

真琴 そんなんちゃうけど…。でもなんか申し訳なくなってるっていうか。

義高 誰に？

真琴 …地震に遭った人に。

義高 …。(携帯をテーブルへ) あ、ごめん。なんか飲みますか？(立ち上がる)

真琴 え。…じゃあ。もしよかったら。

義高 (ドアのほうへ行きかけ) よければこっちどうぞ。(ソファを促がす)

真琴 …どうも。

義高 コーヒーで？

真琴 あ、はい。

義高 ちよつと待って。

真琴 ありがとう。

義高、キッチンへ。

真琴、立ち上がりソファへ移動し座ろうとするが、ソファのカバーを見て動きを止める。

義高 (と、ドアより顔を出し) ポットの湯でもいいですか？悪いけど。

真琴 あ、全然。

義高、再びキッチンへ。

真琴、そのままダンボール箱に近づきかけるが思い直してソファに腰を下ろし、改めてカバーを少しめくったりするが、やがてテーブルの上の携帯に目をやる。ややあつて義高、不揃いのコーヒーカップを両手に入ってくる。

義高 ブラック。一応ドリップ。(二つをテーブルへ)

真琴 ごめんなさい、わざわざ。(カップを見て)…あ、これ。

義高 …そっか。(携帯を手に取り、女物と見えるカップを持ってサッシのほうへ) 飲んだらそれも一緒に入れないと。

真琴 二つ…あつたよね、これ。(義高が手にしているカップを見る)

義高 一個割れたんで。棚が倒れたから。揺れたことは揺れたし、やっぱり。(外を見る) 少しの間。

真琴 なんか思ったよりすっきりしてた。

義高 はい？

真琴 地震もやけど…。(改めて部屋の中を見回し)思ったより綺麗にしとって、へえって。

義高 …。(所在無さげにデスクへ)

真琴 あ、ちょっとびっくりしたってどうか。

義高 そう？

真琴 あんまり帰ってないの？ここ。

義高 …なんで？

真琴 あ、何となく…。キッチンもお鍋とか見えへんかったし。何ていうか、あんまり住んでる感じがせえへんってどうか…。さっぱりしてるから。

義高 (小さく笑って)…何の詮索？

真琴 …ううん。ごめんなさい、詮索とかじゃなくて。

デスクの上に置いた携帯のバイブリータ音。

義高 (携帯を手に取り、見て)…。

真琴 大丈夫？

義高 …メールだから。(またメールを打ち始める)

真琴 大きなお世話やけど…。描いてへんの？絵は。

義高 …。

真琴 もう全然？

義高 (小さく笑う)

真琴 忠さんは？順調？…まだ描いてるんでしょ？

義高 そりゃ描いてるでしょ。

真琴 その後は？うまくいってるの？

義高 何？うまくって。

真琴 調子はどうなんかなと思って。絵本の。

義高 よく分からない。俺は担当外れたから。

真琴 え…。そうなん？

義高 っていうか、調子も何も…作家先生ですから。俺がどうこう云うようなことでもないし。

真琴 …。

義高 飲まないの？コーヒー。

真琴 え。

義高 俺、そんなに時間もないので。この後出掛けるから。

真琴 ごめんなさい。

義高 冷めちゃうし。どうぞ。(メールを送信し携帯をデスクへ)

真琴 …いただきます。(コーヒーを飲む)

間。

真琴 昔さ、嫌いやったね。メールしたまんま道の真ん中歩いてくる人とかさ、どんだけ

周りが見えてないんだって。意味分からんって。(笑って)変な感じやね。一緒におつて、私が携帯いじっとしたら、俺がいるのに何なの？って。

義高 ……何？なんでそんな話すんの？

真琴 あ、そうじゃなくて…。ただの昔話っていうか。違うんだなって思っ

義高 ……

真琴 ちよつと思いだしただけやから、ほんまに。時間が経ったんやなって…。

義高 地震があつたからでしょ。

真琴 え。

義高 でもその前からそう思ってたわけじゃないでしょ。

真琴 え、何？

義高 あのさ。さっきの、申し訳ないとか…。なんか怖いと思うよ、そういう人つて。自分が云つてることがズレてないって思い込んでるじゃって。

真琴 ……どうということ？

義高 さも分かつたような顔してるからさ。自分の物差しだけでしかないっていうか。どつか他人事だから云えるわけじゃない、結局。…そういうこと云うのが、ある意味ブームみたいなもんだし、今。

真琴 ブーム？

義高 会社にもいるよ。普通に電気使ったら白い目で見てきたりとか。東北のこと考えてじゃなくて完全にテレビとかの受け売りなの。え、お前誰？みたいなさ。それ云つてることに自分が満足してるだけで、この先10年20年同じことなんか云い続け

真琴 ……ないから。

真琴 私はね…。

義高 そういふ奴に限って、一本当たった作家を、初めからモノが違ってたとか恥ずかし

げもなく云つたりとかさ。原稿取りに回ったこともないくせに。

真琴 そんなん云いたかつたわけじゃないんやけど。

義高 同じだよ。いい人ぶつて気持ちよくなってる奴、自分の空っぽさに気づけてない奴。

真琴 ……

真琴 ……そうだよね。しっかり自分を持って生きてる人からしたら、私の云うることな

義高 ……(小さく笑って)何それ？

真琴 ううん。昔もよう云われたのにね、私がすぐ余計なこと云うから。

義高 ……

真琴 ……でも…よかった。仕事。頑張っ

義高 ……(小さく笑って)は？高卒がお情けで入れてもらったんだから、しがみつくしかないでしょ。この歳から土方とか今さらありえないし。ここの払いもまだまだで…。分かつてるでしょ。

真琴 なんかがごめんなさい。思わず連絡しちゃって…。ニュース見て居ても立ってもらえなかったから。

義高 …。

真琴 そうやね。勝手やけど…。何ていうか、やっぱり気になったから。…それも自分の物差し？やね。

義高 何も云ってないけど。

真琴 とりあえず大事になってなくてよかったです。

義高 …荷物どうしようかと思ってたから、俺も。ちょうどよかった。

真琴 …。(ダンボール箱を見る)

義高 でも運べないでしょ、それ全部。送ればよかったんだけど、住所知らなかったから。

真琴 …そうやったね。

義高 住所教えてもらえたら。

真琴 平気、自分でやるから。

真琴 デスクの上の携帯から、ピーピーというけたたましいブザー音。

真琴 …あれ？(義高を見て) それ、さっき音…。

義高 …。(携帯を手にとって音を切り) 気象庁の。強い揺れに備えてって。

真琴 地震来るってメール？

二人、しばし硬直するが、義高、立ち上がりキッチンへ。

真琴、サッシを開けベランダへ、外よりクラクションの音などが聴こえる。

ややあつて義高、キッチンより戻ってくる。

義高 (一瞬真琴を探すが、ベランダに気づいて動きが止まり)…。

真琴 (義高に気づき) 余震？

義高 …たぶん。

真琴 いつ？

義高 緊急って。

真琴 …来おへんね。(ベランダの外を振り返ったり) 大丈夫かな？

義高 今いるところにも来るの？自分が。(様子を窺いつつ再びデスクへ)

真琴 …分からねんけど。

長い間。

真琴、部屋の中へ入りサッシを閉め、そのままダンボール箱のところへ。

真琴 (座り込み、半分ほど開いた蓋から覗くベビー用品を見て)…2年なんて思えへん。

義高 え。

真琴 2年ちよつとなんやね。…ここに住んでたなんて思えへんし。時間が経ったんやな  
って思う。

義高 …よかったんじゃない？

真琴 よかった？

義高 自分でしょ、変わったのは。

真琴 私？

義高 なんかさっぱりしててさ。リセットされましたって感じで。言葉遣いも全然違うし。  
真琴 あ、関西弁？やっぱり向こうに住んでるとね、絶対もらっちゃうんよね…。(笑って)  
っていうか、これがもともとやし。

義高 だからよかったんじゃないの。もともとの自分だっというんなら。

真琴 (ベビー用品を手にし)…こんなんであんな欲しかったんやろって思うわ。あんな…今はもう嘘みたいになんとも思わんのに、なんかまるで生きていかれへんくらいのもっと大事やった。

少しの間。

真琴 (笑って) 40やし。考えられへん。…29やったもん、最初会った時。

義高 そうだっけ。

真琴 うん、6月で1です。30なんて信じられへん！とか騒いどったけど…。40になつたらもはや騒ぐ気もせえへん。悟りの境地。

義高 …。

真琴 じゃあ今…3？

義高 …歳？それ。

真琴 3つ違いやったなって。10月やったもんね？

義高 なんで歳の話？

真琴 思わへん？ほんとに自分が40なん？って。

義高 もうとつくに過ぎたから、俺は。

真琴 あ、そうや…。(小さく笑って) アホやね。考えたらその時一緒にあったし。

義高 …おかしい？何か。

間。

真琴 そうや、珠実覚えてる？

義高 …。(頷く)

真琴 せっかくこつち来るから会おうと思つて連絡したの。お店順調みたい。すごいよね、女手一つで。猛もこの春でもう4年生やつて。きつともうあつという間に中学生やな。私のこと覚えてるか。

義高 …。

真琴 あ、みずきちゃん？やったっけ、姪っ子ちゃん。みずきちゃんちゃうかった？

義高 …美里。

真琴 あ、そうや、美里ちゃん。(小さく笑って) 私、ほんまアホや。相変わらずやね。

義高 …。

真琴 大きくなったやろうね。もう…小学生？

義高 そうだね。

真琴 可愛い時だよね。

義高 どうだろ。会ってないから、俺はずっと。

真琴 ずっと？

義高 自分は？

真琴 え？

義高 その後様子とか。…お母さんの。

真琴 あ、うん。

義高 まあいいんだけど。

真琴 死んだ。

義高 …はい？

真琴 先月ね、亡くなった。お母さん。

義高 え。

真琴 うん。…自分のことももう分からんようになってたから。最後はわがままばっかり云うて、私が怒ったら子供みたいに怒鳴ったり泣いたり…。手えつけられへんかった。あんだだけ口下手で、思ってることなんも喋られへんかった人が。

義高 …。

真琴 でもね、5月で78やったから、なんだかんだ長生きしたと思うし…。私が昔にしたら遅い子やったしね。父親のおらん恥かきっ子抱えて、朝から晩まで働いて、しんどい思いばかりしたんやから、最後までい何も分からんようになって死ねてよかったんちゃうかなって。…あ、でも今思った。孫の顔も見せられん行き遅れの一人娘に、母親の気持ちを体験させてくれたんかもしれへん、自分が子供になって。(小さく笑って)…あ、ごめんなさい。なんかアホみたいに喋ってしもて。

義高 …別に。

真琴 …ずっと親子らしいことしたり、話したりせえへんまんま東京出ちゃったし、最後だけ一緒におっても、結局もう今さらやったんかもしれへんけど…。なんかいなくなってみてね、私天涯孤独なの。(笑って) 気いついてびっくりやねんけど。世の中に家族がいないのってこんな感じなんやって。

義高 (思わず笑って) 何それ？それって…。

再び、携帯のバイブレーター音。

真琴 …メール？

義高 苛立ったように立ち上がり、携帯を手に取り寝室の戸を開け入っていく。

義高 (入り際に電話に出て)…何?…だからメールしたよね? (戸を閉める)

寝室より、義高の話し声があうつすらと聴こえる。

真琴、ダンボール箱の中を探り、何かに気づいて取り出す。

表面に細かな模様と仕掛けが施された木目細工の小さな箱。ひみつ箱。

真琴 …。(少し微笑んだように見える)



真琴、その箱の中を探るように振り、仕掛けを操作し始める。  
しばらくして義高、戸を開けて慌てた様子で戻ってくる。

義高 (真琴に何か云おうとするが、ひみつ箱に夢中になっているのを見て) …。

義高、上手のドアのところまで行き、壁のスイッチを入れ、部屋の電気がつく。  
いつの間にか、ベランダに射し込んでいた夕陽はかなり傾いている。

真琴 (気づいて) あ…。

義高 (部屋を見回したり) 揺れなかった？今。揺れたと思ったんだけど…。

真琴 そうだった？…地震？分からなかったけど。

義高 いや…。(ベランダの外を窺う)

真琴 これ懐かしい…。ひみつ箱、だったよね？箱根行った時の。

義高 …。(頷く)

真琴 すっかり忘れてた…。どうやって開けるんだっけ？まだできる？

義高 …。忘れた。

真琴 開け方書いた紙あったよね？動かす順番の書いてあるの。あれがないと分からない。  
ないの？あれ。

義高 …。失くなったみたい。

真琴 そうなの…。どうやるんだっけ。(再び必死でいじり始める)

義高 今夜はどうするの？

真琴 (箱をいじったまま) え。

義高 今夜は？ホテルとか取ってるの？

真琴 (箱をいじったまま首を振り) まだ考えてない。

義高 …。

真琴 (箱をいじったまま) あー悔しい。中になんか入れたよね、これ。

義高 …。そうだった？

真琴 (箱をいじったまま) 入れた。

義高 覚えてない。

真琴 (箱をいじったまま) 入れたよ。なんか大事なものだった気がする。

義高 そうだっけ。

真琴 (箱をいじったまま) 絶対そう。大事なものだった。

義高 …。

真琴 (箱をいじったまま) あ、ごめんなさい。もう出掛けるんだよね。

義高 …うん。

真琴 (開かずに) あーあ…。(立ち上がって、ダンボール箱へ) 持てるかな、これ。

義高 (小さく笑って) っていうか、何？

真琴 え…。何が？

義高 それ。言葉。

真琴 言葉って？

義高 急に標準語になって。何なの？

真琴 …。(部屋を見渡し) そうだよ。失くしたんだね、あの紙。(改めて義高を見つめる)

義高 (ややたじろぎ) 何？

真琴 開かないよね。前はあったのにね。なんで失くしちゃったんだろうね、私たち。

義高 …何云ってるの？

真琴 だってさ、開かないよね。開け方忘れたのに紙失くしたら。

義高 …。

真琴 いらないの？これ。

義高 俺は…別に。

真琴 そっか。(ひみつ箱を見つめる)

義高 …どうしたいの？

真琴 え。

義高 どうしたいと思ってるの？ほんと。

真琴 どういう意味？

義高 これから。

真琴 今夜？

義高 今夜っていうか…。これから。

真琴 …。

義高 嘘とかついてない？

真琴 何？嘘って？

義高 なんでそんなこと云うの？ほんとにさっぱりしてるの？

真琴 何の話？

義高 子供、ほんとにもう欲しくないって思ってるの？ほんとに珠実さんに会いたい？

真琴 …。

義高 だったら今までもたまに会いに来たらよかったじゃない。なんでわざわざ来たの？

真琴 だから…気になったから。

義高 今さら？

真琴 なんで？おかしい？

義高 云いたいこととかあるんじゃないの？

真琴 ないよ。もう会えだし、話せたから。無事なものも分かったし。

義高 …俺はついてる、嘘。…云ってない、と思う。

真琴 …何を？

義高 (手にしたままの携帯を) なくちゃダメだって思った。

真琴 え？

義高 地震の後、電話もメールも全然繋がらなくなったなら、ものすごい心細かった。急に世界はデカイなんて感じて、周りが大騒ぎしてるのに自分はポツンとして、やたら小さいって思った。こんなものでどうにか繋がってたんだって思った。こんなものがないと、すっかり何もしようがないんだって思った。(携帯をデスクに置いて) ……そしたら二人で住んでた時のことばかり思い出した。

真琴 ……

義高 さっぱりしてるみたいでよかったかと思ってない。…まだ変わってなかったらいいと思ってた、ほんとは。でももう何も思わないのなら、そうなら…。じゃあ俺も何も思っていないようにしようって。

真琴 ……

義高 ……なんで？

真琴 ……なんで自分も何も思っていないように？

義高 ……ずっとそうやって…きたから。

間。

真琴 たしかに外から見てるだけなのかもしれない。(ひみつ箱をテーブルの上へ)

義高 え？

真琴 そう。私も中に入れたもの忘れてるし。

義高 ……ひみつ箱？

真琴 ……音がするの。頭の中で…かな。

義高 ……音？

真琴 何かを失くす時にね、音がするの。前から。聴こえるっていうか、響くって感じなんかな。(天井を見上げ) なんか電気のスイッチが入ったみたいにパチッて感じ。あつ…って思う。この人に会わないんやとか、ここには来ないんやとか、もう交わらないんやなって、頭の中で音がしてね、はっきり分かるの。

義高 ……

真琴 口でさよならとか云うとつても、心の中ではもしかしたらまた顔合わすこともあるんかなって思うてる時もあるの。云うてることと違う時ってあるの。そんな時は音はせえへん。でも聴こえる時って普通に喋っててもいきなり聴こえる。そしたらもうこれきりなんやって分かるの。そしたら逆らわへん。逆らわれへんし。

義高 ……そんなの…。俺といて音がしたっていうこと？

真琴 ……

義高 ……いつの話？それって。今？

真琴 ……云うこと聞いてくれへんでしょ？自分の人生って。

携帯から、ピーピーというけたたましいブザー音。

義高 あ…。(ふと我に返ったように、携帯を手に取る)

義高、サッシを開け、キッチンを覗いたり。

義高 (ふと、その場に立ちすくんだままの真琴に気づき) …真琴？

真琴 …。(その場にうずくまる)

義高 (またベランダを気にしたりするが、真琴を見て) …どうした？

再び携帯から、ピーピーというけたたましいブザー音。

真琴 (顔を上げるが、背を向けたまま) …義高さん。ごめんなさい。私、思い出した。

義高 (携帯を気にするが) …義高さん？

真琴 思い出したの。

義高 どうした？…何を？。

真琴 よっちゃん、だよね。

義高 え。

真琴 お好み焼き屋。…ごめんなさい。

義高 …。

心なしか外より聴こえるクラクションの音が大きくなったように感じられ、かしそれをかき消すように携帯のブザー音が強く鳴り続けるが、二人とも動かない。

暗転。